

〈老いがい〉時代をつくる

上村 協子

東京家政学院大学教授



本当に人生でやりたかったことは何だったのか。歳をとると自分自身にそんな根源的な問いかけをする時間ができてくる。自分の生涯を見通す新たな視線や姿勢もできてくる。

そんな時、歳を重ねたからこそできること、歳を重ねたからこそやりたいことが見つけれられるかもしれない。それは、〈老いがい〉と呼べるのではないか。〈老いがい〉という言葉が、私たちを新たなステージへと導いてくれる。

1. 「〈老いがい〉の時代—日本映画に読む」

「〈老いがい〉っていい言葉でしょう。生きがいで、死にがいでなくて〈老いがい〉よ。」と地下鉄丸ノ内線の電車のなか、「老いの近代」（岩波書店 1999 年）などの著作がある天野正子氏が隣の席から囁かれた。約 1 年半後、63 作品の日本映画の紹介をもとに、日本の〈老い〉を語る天野正子『〈老いがい〉の時代—日本映画に読む』（岩波新書 2014 年）が出版された。

なぜ、「日本映画に読む」だったのか。あとがきによれば、「老いていくものには、老いに固有の時間の流れがある。時間の大方は過ぎ去った生活の歴史に立ち戻り、過去の世界を蘇らせ、生き直すことに当てられる。過去とは、自分が生きている実感を抱くことのできた時間である。」

人によって、仕事や、恋愛や、子育てや、趣味など、そして、闘病や、困難に立ち向かった経験や目にした光景など、実感を抱く過去の出来事は異なるだろう。天野氏にとって、実感のある過去とは、上京して池袋東口近くの映画館で映画三昧をおくった学生時代の時間だった。その時間に立ち戻って書かれた一冊が「〈老いがい〉の時代—日本映画に読む」である。

2. 〈老いがい〉の共同創造—「地域プロデューサー」

一人で過去に戻り探す〈老いがい〉もあるが、共同創造（co-creation）をポイントに住民ニーズを軸とした地域やコミュニティ共創から〈老いがい〉を探す試みもある。

高齢者住宅「ゆいま〜る」では、住民のニーズにこだわった生涯活躍のまちづくりをめざしている。その特徴は、入居する高齢者に、居住者同士でして欲しいこととできることをそれぞれ出してもらうこと（例えば「ゆいま〜る那須」では、「ま〜る券」というハウス内通貨を介してサービスをしたり、受けたりする仕組み）である。

こうしたまちづくりの中心となるのが、一般社団法人コミュニティネットワーク協会が養成する「地域プロデューサー」である。「地域プロデューサー」は、入居予定者、建設業者、行政、医療福祉関係者、NPO などと連携をとり、その関係調整の要となる役割を果たす。

71 戸のサービス付き高齢者向け住宅である「ゆいま〜る那須」は、2007 年にプロジェクト実行委員会を立ち上げ、2010 年 11 月に第 1 期、2012 年 1 月に第 2 期がオープンした。ここでは「地域プロデューサー」が、準備段階から完成後 1 年くらいまでの間、現地に住み込んで他の参加者と討議を繰り返し、共通のイメージを創り上げるプロセスを経ることで、新しいコミュニティへの帰属意識が形成された。〈老いがい〉共同創造のモデルといえる。

〈老いがいい〉は、老いた人びとだけに求められるものでも、老人の自立を一方向的に強調することでもない。「地域プロデューサー」のような周りの人びとが、共感し支えあって創り出すコミュニティを通じて〈老いがいい〉を創造することもできる。

3. 日本社会と世界の〈老いがいい〉

人生 100 年時代を提唱したロンドン・ビジネススクールのリンダ・グラットン氏は、アンドリュー・スコット教授との共著『ライフ・シフト』（東洋経済新報社）日本語版への序文において、「長寿化の負の側面」を話題にし、「日本は、世界でも指折りの幸せな国」であるのに、「この変化を恩恵ではなく厄災とみなす」傾向があるとした。特に日本では、起業家志望者への支援や評価が低いことから、試行錯誤をしながら自分自身のビジネスを創り出す「インディペンデント・プロデューサー」への一歩を踏み出しにくい点を指摘している。地域に住み、地域の暮らしを豊かにするために小さなビジネスを興すことができる環境を整えることは、若い世代の生活設計にも、新たな選択肢を増やすことにもつながる。

高度経済成長期は大量生産・大量消費・大量廃棄の時代であった。失われた 20 年を経て高齢化、成熟化が進み、何を獲得するかではなく、どのような関係を育てるのかに動いてきている。自然との共生、持続可能な社会に向けて地域から生活者の視点で、ゆっくりと暮らしを大事にする生き方を育てていける転換点でもある。

WHO（世界保健機関）の出した 2021 年版（数字は 2019 年）の世界保健統計（World Health Statistics）によると、平均寿命が最も長い国は日本（84.3 歳）である。男女別でも、女性は 86.9 歳の 1 位で、男性は 81.5 歳でスイスに次ぐ 2 位である。長寿社会のトップランナーとしての日本の動向は、今後高齢化が本格化する中国などの国々から注目されている。日本社会はどのような〈老いがいい〉を世界に示せるのか。

4. 「〈老いがいい〉の時代—日本映画に読む」に見る 生活者・当事者意識と生活創造

「その人は森の木を伐り自力で家を建て直し、先祖になった。」東日本大震災から 39 日目、岩手県陸前高田市気仙町から始まる池谷薫監督のドキュメンタリー映画「先祖になる」（2013）の主演である当時 77 歳の佐藤直志の写真が、この本の扉に示されている。木こりだった佐藤直志は、消防団員の息子が津波にのまれ、自分が建てた家も水につかり、一度は仮設住宅へ移ったが、「自分の先祖が生きてきた元の土地に家を建て直し、自分が先祖になる」と宣言し、新しい暮らしを創り出した。

個人の経験を通じて学んだことを活かし、社会参加活動を展開することを通じて、さらに新しい学び、活動につなげることを、「生活創造」という。「生活創造意識」とは、自分の生活に当事者意識を持ち、創造的な課題設定とその過程を工夫し楽しむ意識を指す。老年になって人が得るものは、それまで知り得なかった新しい人生の見方〈老いがいい〉である。

〈老いがいい〉の時代とは、人びとがそれぞれの固有性において老いと向き合い、あるいは「共感」の楽しさから多面的な価値へと転換していく、生活者視点の生活設計時代ともいえよう。